

<「知るっば!久留米」 令和3年9月23日(木) 12:30~放送分>

久留米入城400年(後編) ~第4回~ 「久留米藩の利水と治水」

<ゲスト: 久留米市文化財保護課 白木 守>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今週も、『久留米入城400年』をテーマにお送りしていきます。ゲストはこの方です!

ゲスト: 白木さん(以下「白木」)

久留米市文化財保護課の白木守です。よろしくお願いします。

坂本 今回は『久留米藩の利水と治水』がテーマということですが、
別名を「一夜川(いちやがわ)」とも呼ばれたほどの暴れ川である筑後川と
いかに暮らしていくかというのは、江戸時代にも大きな課題だったんでしょうね。

白木 そうですね。筑後川は日本の三大暴れ川、つまり坂東太郎と呼ばれる「利根川」、
筑紫次郎の「筑後川」、四国三郎の「吉野川」と言って、日本でもトップ3に入るほどの
洪水や水害が多い川として、江戸時代から既に認識されていたんですね。
久留米藩にとって領内の農業の振興や生産力を高めるためにも、
いかにこの筑後川と向き合っていくのかが非常に大きな課題でした。

坂本 まずは「利水」。筑後川の水をどうやって利用していったのかについて伺いましょう。

白木 九州最大の河川である筑後川ですが、川の水面の方が平地よりも低いため、普通に考えると、
そのままでは田んぼに水を引き入れることができません。
そのため、人力で桶(おけ)などを使って水を汲み上げるしかなかったんですよ。
すぐ近くに水が流れているのに使えない「水近けれど、水乏し」という状態でした。

坂本 切ないですね。目の前の川には水がたっぷり流れているのに、それが農業に使えない。
さぞかし農民のみなさんは、もどかしい気持ちだったでしょうね。

白木 そこで村の人達は考えるんですね。
標高の高い上流から横に長い水路を掘って、農地に水を引こうと考えるんですよ。
理屈では言うのは簡単ですが、実際に行動を起こすとすると、
そんなに簡単なものではなかったんですよ。

坂本 今みたいに重機もない時代ですから、人力で掘るだけでも大変な年月がかかったんでしょうね。

白木 当時の大石村、現在のうきは市になりますが、その5人の庄屋が最初に立ち上がります。後に「五庄屋」と呼ばれ、神様としても祀られている人たちなのですが、この人たちが、何とか堀を掘らせて欲しいと立ち上がったわけです。しかし、洪水を心配した藩は認めなかったんですね。「事業が失敗した場合、私たちが礫（はりつけ）にしても構わない」という決意と、普請奉行の丹羽頼母（にわたのも）の助言もありまして、寛文4（1664）年1月に起工式を行い、わずか2か月ほどで3キロの水路を完成させます。

坂本 その事業は成功するんですか？

白木 そうなんです。工事は成功して、秋は実り多き収穫になりました。それを知った周辺の村から「うちも掘りたい」と要望があり、また、藩も年貢米の増収が期待できるとして第2期工事を認めます。最終的には、堰を設けて水をせき止めるなどの努力をして、最初の工事から10年後の延宝2（1674）年に、大石長野水道が完成しました。

坂本 最初は様子見だった藩やお殿様ですが、生産力がアップしたのを見るとさすがに「ぐうの音も出ない」といったところでしょうかね。

白木 そうですね。これは農民の努力の賜物（たまもの）ですよ。その後、筑後川の右岸、現在の北野町にあたる村からも要望が出てくるんです。ところが、このあたりは筑後川の水深が深いことや福岡藩との藩境にあたるため、洪水を心配した福岡藩からの反対や妨害があって、ながらく事業の実施が見送られていました。

坂本 北野町の上流、今でいうと朝倉市は福岡藩なんですね。

白木 このままでは埒が明かないということで、福岡藩からの最終的な返事を待たずに、やむを得ず水路や堰を作る工事を始めるんですね。耳納連山から大きな石や小石を運んで造ったのが恵利堰（えりぜき）で、そこから筑後川の北側に引いた床島用水というのがあります。ここの工事も2か月ほどで終わっています。ただ、舟渡しの問題や中洲の領有権、漁業権などをめぐる福岡藩との対立は続いたままでした。

坂本 水をめぐる争いというのは、なかなか根深いですよね。でも、こうした難工事が完成して、現在の農業にもつながるような恩恵を受けているんですよね。

白木 そうですね。床島用水なんかは、現在も使われております。
それは、やっぱり先人の努力による賜物だと思っています。
こうして生産力が向上し、年貢米も増えたわけですが、
一方で、用水路の維持管理が問題になったり、せっかく収穫した余剰生産物も藩に取り立てられ、
農民の暮らしは決して楽ではなかったようです。

坂本 ああ・・・それはまた酷いですね。
せっかく苦労したのに、その努力もあまり報われないように思いますが、
何もしなければもっと暮らしは厳しくなっていたということでしょうね。
では、次に「治水」についてお話をしてください。

白木 現在でも洪水等ありますけど、水害から守るために堤防を造ったり、
蛇行する川の流れを真っすぐに変えたりする治水事業は、現在も続く永遠の課題です。
江戸時代、特に城下町を含めた人的・物的な被害がものすごく深刻だったんですよ。

坂本 今も大雨洪水の被害は深刻ですが、
当時は大きな洪水が起こると、農作物も一瞬でダメになったりしますからね。
先ほどの利水事業とは対極的な施策が必要になってくるわけですね。

白木 そうですね。今度は水を遠ざけるための施策です。
筑後川は江戸時代に「2年に一度、決壊する」と言われたほどの暴れ川で、
最初に取り組んだのは、蛇行する川の流れを、真っすぐ直流化する工事です。
わかりやすく言うと「水路のショートカット」ですね。
これは、有馬家の前の田中吉政の時代から取り組まれています。

坂本 田中さんは、有馬家の前に久留米を治めていた田中家の方ですね。

白木 この人が始めるのですが、今の小森野や長門石、下田、浮島などの集落は、
現在、筑後川の右岸にあります。江戸時代までは現在の久留米市街と地続きでした。
蛇行している所というのが、今の佐賀県と福岡県との県境になるんです。
蛇行した川の洪水対策として放水路が掘削され、それが現在の筑後川の本流となっています。

坂本 川の境が国境になっているんですね。ぜひ地図で確認してみてください。
そして、堤防も作っていくということですね。

白木 そうです。川の流れを管理するために、最初に佐賀藩が千栗堤防（ちりくといぼう）を築くんです。
そうすると、堤防に当たって跳ね返された水は久留米藩に流れ込みます。
すると、久留米藩はたまったもんじゃないと安武堤防を造って対抗します。
佐賀藩も延長して堤防を造る、あるいは支流とかにも堤防を作って次々と延長していった結果、

今のような堤防が出来上がっていくわけです。

一方で、それをやり過ぎたばかりに、また洪水が起こると非常に皮肉な結果にもなるんですね。

坂本 先人の知恵や工夫が、今でも一部に見られるということですね。

白木 また、筑後川の下流は、佐賀藩との藩境（国境）でもあるため、
こちらも藩同士の争いの原因にもなっていくわけです。

特に、有明海の漁業権などの問題も絡んで、非常に複雑になってくるんですね。

そして、その工事に駆り出されるのはやはり領民で、村々に動員が割り振られ、
人々の暮らしも非常に厳しくなったんですね。

坂本 そういう領民に動員を強制していたということで、江戸時代から続く治水事業ですが、
水害対策は現在進行形で、近年の大規模水害を見てもわかるように、
決して他人事ではないと思います。みなさんもお注意いただきたいと思います。
といったところで、お時間になってしまいました。

さて、来週はいよいよ『久留米入城400年』シリーズの最終回になります。

『これからの100年に向けて』をテーマにお聞きします。

楽しみに。